

高

校の卒業を前にして、バイクでの一人旅を思いつき、近所のバイク屋で最安値だった七千五百円の原付カブを買って奈良まで走らせた。東大寺のお水取りを見たくて祭りの日の早朝に出かけたのだが、早春のツーリングがこれほど寒いとはまったく想像していなかった。途中雪のちらついていた国道9号線をひたすらに走って奈良に着いたときには、すっかり凍えて歯の根も合わず、見かねて旅館の女将さんが早めに風呂に入れるようにしてくれたのだが、一時間浸かったにもかかわらず、上がつてからも震えが止まらなかった。お水取りなんぞどうでもよくなって、ひたすら布団にくるまって暖を取った。その日から一週間奈良を回った。再度低体温症の危機を感じつつも、どうにか無事に帰った。

なぜ奈良だったかといえば、日本史の教科書に登場する寺だの人物だの宝物だのに強く心ひかれていたからである。法隆寺、聖徳太子、止利仏師、漆胡瓶：どれもこれも古代に通じる呪文のようで、ただただそこに近づきたかった。

自分がそこにいる、と実感することこそ旅の全てで、あとはおまけみたいなものだと思うのだが、どのようにしてそこに至ったかによって、実感の強度もまた違ってくる。低体温症や交通規則だけじゃない、あ

れにもこれにもまったく無知であったのは、決してほめられた話じゃないのだが、無知が実感を補強してくれたのはまちがいない。

観光客の途絶えた東大寺戒壇院で、国宝四天王像とたった一人で向き合った。目の前にあるのは、教科書で何度も見てよく知っている像そのものだ。でも、今自分を包んでいる空気はまるで違う。こんな純度の高さは今まで感じたことがなかった。その場を離れがたく、ようやくして出たのだが、すぐに惜しくなってもぎりのおじさんに、また見たいのですが、と頼んだ。総白髪のずんぐりしたおじさんは、にっこり笑ってうなずいた。

その日どこに行くのか、どこで寝るのかも決めない旅をずっとしていない。どうせなら退職してから気ままに行きたい、と取っついておいた候補地が膨れ上がっている。ところが、いざ退職してみたならコロナ禍で重石につながるという残念な状況だ。ただ妄想は、勝手に動き出してあれこれアイデアを押しつけてくる。再びカブでの一人旅はどうか、と調べてみたら少女とカブが主人公の漫画もあって、人気になっていてはいか。恥ずかしいようなカラバリも出ている。

四十数年前、「それで来たの？」と散々言われたものだったが、ちと最先端過ぎたか。



専業ババ奮闘記 (その2) 59

木幡智恵美

虫捕り (6)

孫たちが来た日、寛大と実歩を裏庭で遊ばせながら草を抜いていると、もじやもじやの小さな葉。「あつ」と声を出すと、「どうした、ババ」と寛大が寄ってきた。「ほら、パセリ」と、まだ一センチくらいの草を指さした。「昨年パセリの苗を二本買って裏庭のプランターに植えた。食べきれないほどの葉を付け、茎が伸びた先には大きな花を咲かせた。去年一年間姿を見せなかったので、消滅したと思っていた。落ちた種から発芽したのだ。もじやもじやの芽がそこら中に広がっている。幸い、寛大と実歩は、スプーンで器に砂利を入れ、おままごとに興じている。私はパセリの芽をスコップで掬ってはプランターに移していった。

そのパセリが店で売っているくらいの苗に育ち、娘にも鉢に移植して持たせた。広がる枝を摘んでコップに挿し、必要な分だけ料理に使っていた。ある時、コップの周りに芥子粒ほどの小さな黒い物がばらついていて、葉をよく見ると、小さな黒い物が。キアゲハの幼虫だ。この幼虫、絵本「はらぺこあおむし」さながらに、大きくなるにつれ食べつぷりは半端でなくなり、しまいに葉を全部食い尽くしてしまう。慌てて裏庭に回り、葉を探してみると、一センチくらいの幼虫が数個見つかった。一つ、また一つと潰しながら、「そうだ、寛大たちに育てさせよう」と思い、三匹ほど取っておいた。去年は畑で捕ったアオムシを持って行ってやった。蛹から羽化した日、二人とも目を丸くして報告してくれた。今年はキアゲハだ。この幼虫、模様ははっきりしてくと美しい。黄緑色の胴体に黒の縞々、そこに黄色い斑点がついている。突いたら出す舌は鮮やかな朱色。この色あいを是非見せてやりたい。

畑に行く途中、幼虫とパセリの葉を持って玉湯に寄った。保育所の体操服姿で寛大と実歩を迎えに出た。「幼虫どこにおる」と寛大。「ほら、ここ」と、まだ小さくて黒い幼虫を指さした。分家したパセリはどうなっただろうかと家の裏に回ると、鉢には茎だけになった無残な姿があった。葉も一緒に持ってきてきて正解だった。

翌日、保育所の帰りに我が家に寄った寛大と実歩は、我先にと報告してくれた。「カマキリが卵から出てきたよ」「ちっちゃいのがいっぱい出てきたよ」

30代フリーター やあ、ジイさん。あと1年もしないうちに後期高齢者だな。調子はどうだい。

年金生活者 眠りが浅くなった。わりとよく眠れたときは体ばかりでなく、心も軽く感じられる。たとえば人を憎たらしく思うことが少なくなる。

体と心は自律神経を介してつながっているから、体調のいいときは機嫌もいいし、その逆もまた真だ、と医学的、生理学的には説明できるだろう。私は別の言い方をしてみたい。身体は感情の土台だから、機嫌のよしあしを左右するし、その逆もある、と。

人の生涯は母の身体から自分の身体が分離したときに始まる。それは母胎の楽園を追われることであり、身体が快感だけでなく、苦痛を知ることの意味する。そのときの母への恨みが憎しみの感情の原型をなす。一方で、授乳をはじめとした手厚い庇護を与えてくれる母への依存が愛の感情の原型となる。

つまり人間は憎しみも愛もおのれの身体と切り離すことができない。

き言ったとおりだ。

最初の喜怒哀楽は母をめぐる感情として起動すると言っている。やがてそれらは内臓系の各部分にそれぞれの起動の場を得る。「怒」と「楽」は腸に、「哀」と「喜」は心臓に、といった具合に。

それに対して、内臓系の両端を起動の場としているのが性的な「快」だ。口、肛門、生殖器が両端をなしている。三木成夫の言い方をまねて言うなら、それらはヒトの体内に封じ込められた母胎の宇宙への入り口にほかならない。

しかし、その宇宙への到達は不可能であり、入り口をその代替とするしかない。場が限定されるぶんだけ快は濃縮される。というより、胎内にいたときは快でも不快でもなかった状態が到達不能を代償として快に変わる。

30代 性の快感は感情とはだいぶ違う。

年金 三木成夫は植物と動物の違いについて次のように書いている。「植物のからだは、動物の腸管を引き抜いて裏返しにしたものだ。根毛は露出し

30代 身体が感情の土台だというのはわかる気がする。どんな仕組みになっているんだ。

年金 身体の中でも内臓系が土台となる。解剖学者の三木成夫は、「植物のからだは、太陽を心臓にして、天地をめぐる巨大な循環路の末梢毛細管に譬えられる」のに対して、「動物のからだは、その発生が物語るように、最初から宇宙の一部を切り取っておのれの体内に封じ込め」ると指摘している（『胎児の世界』）。

この考えに従えば、母胎の宇宙と臍の緒でつながった胎児は植物的な存在に生まれ落ちると同時に動物的となる。母胎の宇宙の一部を切り取り、それを内臓系としておのれの体内に封じ込めたのが乳児だ。

生誕とは、母胎の楽園を追われ、この世界の荒れ野に放り出されることを意味する。胎児にとってそれは宇宙の崩壊であり、その衝撃が母への憎しみを生む。そして乳児として再会した母

た腸内の絨毛となって、大気と大地にからだを開放して、完全に交流しあう。両者のあいだには生物学的な境界線はない」（『胎児の世界』）

そうした植物の特性を備えた胎児はこの世界に生まれ落ちて乳児となったとたんに動物の特性を持つようになる。「動物の腸管を引き抜いて裏返しにしたもの」だった胎児時代の「からだ」はさら

の庇護が母への愛を育てる。

乳児の体内に封じ込められた母胎の宇宙、すなわち内臓系が不具合を起すとき、それは生誕時の宇宙の崩壊の反復として経験される。それは母への憎しみの発生の反復でもある。

他方で、母から受ける授乳は、体内に封じ込められた母胎の宇宙を活性化させ、胎児時代の楽園生活の部分的な反復として体験される。言い換えれば、母胎としての母への愛の反復として経験される。実はそんな愛は存在しなかったのだが、存在したかのように事後的に回想される。

30代 たしかに、怒りを言い表すのに「はらわたが煮えくり返る」とは言うが、「手足が焼ける」などとは言わない。

年金 人間が生涯の最初に感じる怒りは生誕のさいのそれだ。楽園から荒れ野に放り出されたときに覚える痛みとその理不尽さへの怒り。それが母への憎しみを生む一方、授乳が怒りを癒やし、母への愛を芽生えさせるのはさつ

に裏返しにされる。「からだを開放して」いた「大気と大地」は「からだ」の中に取り込まれる。すなわち母胎の宇宙が「小宇宙」に縮められて乳児の「体内」に封じ込められる。

荒れ野に置かれた乳児は一刻も早く、母胎の楽園へ、もとの宇宙へ帰りたいと願う。だが、その宇宙は自身の生誕とともに崩壊した。帰るとしたら自分の「体内に封じ込め」られた「小宇宙」しかない。それは自分自身の体内に入ることを意味する。そんなことは不可能だ。

代わりに「小宇宙」の入り口に到達することで我慢するしかない。自らの口を「小宇宙」の代替とするしかない。

母胎の宇宙に帰ることは植物に帰ることだ。その宇宙の代替がおのれの体内の「小宇宙」であり、さらにその代替が自らの口だとすれば、自らをその口に生える植物としなければならぬ。乳児が自分の指をしゃぶるのはその動作にほかならない。

ニュース日記 791
中村 礼治

心と体のつながり方